

Ⅲ 「ハッピー筋斗雲」の問題点

27時間テレビの「ハッピー筋斗雲」は、「日本全国みんななまか（仲間）だ！」の統一コンセプトに従って、困っている人や悩んでいる人、素晴らしい活動をしている人を、その人たちに内緒で取り上げ、元気づけ喜ばせようという企画である。ここでは、東北地方で美容院を経営しながら、中越地震被災者やいじめで悩んでいる学校へ、無償でりんごを送っているAさんが取り上げられた。

この種のドッキリカメラ的なサプライズ企画で、まず留意されなければならないのは、それが芸能タレントではなく一般の人を対象としていることである。本人が望んで出演するわけではないのだから、その心情や生活には細心の注意が払われなければならない。ここでいえば、企画・制作の根幹に番組の趣旨が謳う「素晴らしい活動をしている人」への真の敬意があったかどうか、放送内容が、同じく番組の趣旨が謳う「(本人を) 元気づけ喜ばせる」ものであったかどうか、まず問われる。

「ハッピー筋斗雲」の企画・制作過程と放送内容は、この根幹の倫理において疑義を抱かせるところが見られる。具体的にいえば、Aさんの活動を称え元気づけることより、江原啓之氏の霊視なるものを見せることに主眼が置かれている。つまり、Aさんがその目的のために利用されたという結果を残している。今回、「ハッピー筋斗雲」の企画・制作に強く自省を求める事由の第一はここにある。

第二は、ここで行われたスピリチュアルカウンセリングなるものの問題である。言うまでもなく、「カウンセリング」は、受ける本人の同意とカウンセリング内容の守秘（非公開）が原則である。「ハッピー筋斗雲」はバラエティーを口実に、あるいはスピリチュアルを口実に、この原則を無視している。そして、Aさんの心情・生活に関わる悩みを強引に設定し、一方的にその生き方への指示をあたえている。

1. スピリチュアルカウンセラー(霊能師タレント)ありきの企画・構成

「ハッピー筋斗雲」のAさんのコーナーは、“悟空&江原啓之 スピリチュアルサプライズ!”のサブタイトルで始まるように、江原氏の霊視に主眼を置いた構成になっている。「美容院経営者・Aさんの無償でりんごを送る活動の紹介、美容院従業員の相談事(手紙)とされる経営難の設定、Aさんを東京に呼ぶ嘘の講演会の説明」のあと、江原氏は約10分間(コーナー全編約17分)にわたり、一方的にAさんの亡き父の言葉なるものを伝え生き方の指示をする。そこには、無償でりんごを送ることへの賛辞は薄く、美容院の経営難を前提とする一方的な生き方の指示だけが繰り返される。

このAさんが江原氏の話聞くだけの構成を見る限り、これがAさんを元気づけ喜ばせる企画であったとは言い難い。つまり、「ハッピー筋斗雲」は初めから、スピリチュアルカウンセラー・江原啓之ありきの企画と受け取らざるを得ない。先に、一般の

人にドッキリカメラ的なサプライズ企画を仕掛けるに当たっての倫理、出演者の心情や生活への配慮について触れたが、ここにはその倫理への意識が見受けられない。それは以下のような取材・構成・演出を見れば明らかである。

(1) スピリチュアルを前提とするAさんの生活状況「経営難」の断定

出演者としてAさんを選んだ理由は、①“素晴らしい活動をしている人”、②“元気づけ喜ばせる必要のある人”の条件に合致していたからである。しかし②の条件「経営難」は、スピリチュアルカウンセラーありきの企画によって、必要以上に誇張され断定されている。放送上の表現に即していえば、美容院の経営難がナレーションと文字テロップで4回にわたって強調され、うち2回は客のいない美容院風景が挿入されている。また、「経営難」の断定の前には、必ずその理由「無償でリンゴを送り続け・・・その経費のため・・・」をつけ、“素晴らしい活動”と“元気づける理由”との因果関係をつくっている。

そして、これらの状況設定が江原氏の伝える“亡き父の言葉”なるもののデータとなっている。しかしAさんによれば、りんごを送ったのは中越地震被災者といじめで悩む学校への2回であり、経営難もAさん自身が否定するところである。

(2) 「経営難」を断定するに至る手続きの瑕疵

フジテレビの説明によれば、番組に届いた美容院従業員の相談の手紙は、番組側で作成し従業員に投函してもらったとのことである。その文面の後段にはすでに、「無償でりんごを送っているため、美容院のお金をたくさん使ってしまい、経営が苦しくなっています」の記述がされている。しかし、これはAさん関係者との交渉過程で出た言葉から番組側が構成上都合のよい方向に推測したもので、客観的な裏づけを取ったものではない。

つまり、「初めに霊能師タレントありき」の企画は、このように初めからAさんへの配慮を欠く無理な状況設定を招くのである。また、それは“美容院従業員への番組側が作成した手紙の投函依頼”、“ウソの講演会の設定”等々にも、出演者への気遣いや心配りの欠如といった形で表れている。このAさんの心情・生活を傷つけかねない「経営難」の状況設定と番組構成・制作の在り方は、番組づくりの根幹の倫理に反するものとして問題が提起されて然るべきである。

2. 放送の公共性とスピリチュアルカウンセラーのショーアップ

サブタイトルに“スピリチュアルサプライズ!”を打ち、江原啓之氏をスピリチュアルカウンセラーと紹介し、「守護霊や亡くなった人の魂と交信し、その声を伝えることができるという」と説明を加える。また、VTR構成の節目節目で、「お父さんの声」、

「亡き父のメッセージ」をナレーション・文字テロップでたたみかける。そして、江原氏は終始「お父さんはこう言っている」と言いながら話を進める。

「ハッピー筋斗雲」の構成・演出はこのように、スピリチュアルカウンセラーのPRの趣で飾られている。しかも、それはカウンセリングを受ける本人の同意を得ないまま行われ、その悩みの誇張・強調までしている。ここに至ると、初めの企画の趣旨「素晴らしい活動をしている人を・・・元気づけ喜ばせる」はもうあつてないようなものとなる。現に、だからこそAさんは、「善意の形をとりながら、結果的に傷つけられた」と、BRC（放送と人権等権利に関する委員会）に相談を寄せた。

民放連の放送基準は、占いや運勢判断、霊視など、科学的根拠に乏しい題材の取り扱いには、慎重な対応を求めている。今回のように、本人が進んでそれを望んでいないケースでは、なおさら霊視などの題材を番組に取り入れることには慎重であるべきである。まして、“おもしろさ”を求めて、スピリチュアルカウンセリングを喧伝するかのような構成・演出は避けられて然るべきである。